

# 共同研究報告 アジア諸国における歴史教科書の比較研究

## 1. 研究課題

アジア諸国における歴史教科書の比較研究 (第一期)

## 2. 共同研究者

山田敦 (研究代表)・赤嶺淳・朝倉美香

## 3. 研究の内容

本年度は、手始めとして研究参加者がフィールドとしている各国における歴史教科書を入手し、それら教科書における東南アジアの記述（東南アジアの歴史教科書においては、日本の記述）について分析を行った。手始めということもあり、入手できなかった国もあったが、概要は以下である。

### (1) 中国における歴史教科書

民国22 (1933) 年中国で出版された世界史の教科書は次のように記述されている。

「元代、福建人林旺がその郷人を率いてフィリピンへ航海に出て、フィリピンで遊牧を捨て耕作をすることを教えた。明代、中国人はルソンなどに移住した」(藩作乗『新課程標準適用小学歴史課本教学法高級第3冊』上海中華書局、民国22年8月)。つまり中国史との関連で東南アジア史観が打ち立てられているといえる。

もう一つの特徴は、現在の世界史の教科書からも明らかなように、人民中国建国前の抗日戦争との絡みで東南アジア諸国が如何に植民地帝国主義に蹂躪されたのか、植民地帝国主義の共通の被害者としての一面が強調されている。中国と東南アジアの連帯感が示されている。

一方で1900年代前半、中国は各国に教育使節団を送り、本国の教育に役立てようとしたのも事実である。東南アジアでは広東省の使節団がフィリピンに行っている。同時期日本にも行っているのだが、その結果、各国の教育情報を得たのであった。むろん教科書についても論じており、歴史的にも中国は東南アジアの教科書に精通していたといえる。しかしながら、中国の教科書にみる東南アジア観は、自国の歴史観をそのまま率直かつ明確に体現したものであった。

### (2) 台湾における歴史教科書

台湾の教育カリキュラムは、中華民国体制の下、中国の歴史・地理の教育に偏重し、台湾の歴史・地理・文化などの教育を長期にわたって軽視し続けてきた。ようやく1990年代に入って、国民中学校の第一学年に「認識台湾」という科目を設け、その歴史編で台湾の歴史を教えることとなった。この教科書『認識台湾 (歴史編)』が台湾を基盤とする最初の歴史教科書である。1997年9月から試用され、翌年から正式採用された。

この『認識台湾（歴史編）』にも東南アジアについて記述がある。記述の分量は少ないが、「第二章 史前時代」において台湾の金属器文化が中国だけでなく東南アジアの金属器文化とも関係があると記述、「第三章 国際競争時期」においてオランダ（インドネシアを植民地にしていた）やスペイン（フィリピンを植民地にしていた）が台湾も占領したと記述、「第四章 鄭氏治台時期」において鄭氏政権と東南アジアとの貿易関係が密接であったと記述、「第八章 日本殖民統治時期的教育、学術与社会」において台湾がアジアの熱帯医学研究の中心になっていたとの記述、など、随所に台湾と東南アジアとの関係をうかがわせる記述がある。

### （3）マレーシア・シンガポール共和国の歴史教科書

ここで分析したのは、Tan Ding Eing著、*A portrait of Malaysia and Singapore* (Singapore: OUP, 1983)の第2版である。これは、マレーシア半島とシンガポール地域の歴史を高校生にむけて解説した副読本で、17章構成、266頁（A4版）からなっている。マレーシアとシンガポールは、植民地期において英領マラヤと海峡植民地として異なる政体として存続していた。その後、マラヤ連邦からマレーシア連邦の結成を経て、シンガポールがマレーシア連邦から独立したのは1965年のことにすぎない。したがって20世紀中葉以前の同地域の歴史を描くにおいては現在の国家を単位にすることはできない。かような前提のもと編まれた本書では、日本軍政期について一章をたててはいない。しかし、11章以降では、政治体制や経済体制、反英独立闘争や社会主義革命の運動などと関連付けながら、日本軍政が現在の両政体とどのように関係しているかについて描写している。

歴史教科書著者の話を聞くことについては、台湾の歴史教科書『認識台湾（歴史編）』の著者である呉文星氏（国立台湾師範大学歴史系・教授）に、山田等が主催する研究会で報告していただき、それに山田・朝倉が参加するきっかけで実現した。この報告は2001年10月27日に神戸大学で行われた。報告内容については、中国現代史研究会編『現代中国研究』第10号（2002年3月31日発行）の呉文星「台湾の国民中学教科書『認識台湾 歴史編』をめぐって」を参照されたい。